

関ヶ谷市民の森愛護会

(平成20年度第3回役員会決定事項等)

平成20年9月7日

「^{やと}谷戸」と「^{さとやま}里山」について

愛護会の仕事に携わっていると、「谷戸」とか「里山」という言葉をよく耳にします。詳しく知りたいと思い、「南部公園緑地事務所」の北洞絵美さんのお知恵を拝借したり、「日の出町」の中央図書館で調べたりした結果を、「Q&A」の形に纏めてみました。(宮本)

Q：金沢文庫には、「谷(たに)」と書いて「やつ」と呼ぶ地名が多いですね。「北谷(きたやつ)」とか「宮が谷(みやがやつ)」とか。

この「谷(やつ)」と発音の似ている「谷戸(やと)」も「谷(やつ)」と同じものですか？

A：確かに「谷(やつ)」を広辞苑で見れば、「関東地方で用いる。語源はアイヌ語か。意味は低湿地。やち、やと、とも言う。」とあります。しかし、この辺でいう「谷戸(やと)」は、「谷(やつ)」とはいささかニュアンスが違うように思われます。

地名の語源によると、「ヤ」は湿地を、「ト」は狭いところを意味するそうですが、この「ヤ+ト」で、両側と突当りの三方を丘に囲まれた細長く狭い湿地帯を表すようになったと考えられています。つまり、「谷(やつ)」は、釧路湿原のような水はけの悪い低湿地のことをいうのに対して、「谷戸(やと)」は、三方を高さ数十メートルの丘陵に囲まれた谷あ

いの低地で小川の源流域のあるような環境を指すものと考えられています。そして、「谷戸(やと)」という表現は、主として神奈川県や多摩地区に多く見られ、同様の地形を、千葉県では「谷津(やつ)」、東北地方では「谷地(やち)」と呼ぶことが多いようです。

Q：成る程。例えば、三浦半島に入ってから京急線はトンネルが多く、トンネルとトンネルの間の狭い谷間のような空間に畑や住居が密集している地形が多く見られますが、これなども「谷戸(やと)」と呼ばれるものですか？

A：正にその通りです。丘陵地の中の斜面樹林に囲まれた浅い侵食谷の低地で、斜面樹林から水が滲み出て川の水源となっているような処。このような地形には古くから集落があって田畑が営まれ、周辺の斜面林は「里山」として利用されて来た処が多いのです。

そして、これらの森林には、クヌギ、コナラ、エゴノキ、ミズキ、ヤマザクラなどの高木落

葉樹やキブシ、ムラサキシキブなどの低木落葉樹が多く、メジロ、ウグイス、コジュケイ、ヒヨドリ、コゲラなどの野鳥が見られます。

私ども市民の森の「いこいの広場」から「禪林寺」にかけての地形も、小型の「谷戸（やと）」を形成していたと言えるでしょう。

Q：ところで、さっき「里山」という言葉が出ましたがこれは何ですか？

A：「里山」という言葉も広辞苑に出ています。平成 10 年発行の第五版に「人里近くにある人々の生活と結びついた山・森林のこと」と初めて掲載され、最近になってようやく認知されるようになった言葉です。

しかし、記録的には江戸の農地開拓時代からある古い言葉で、昭和 35 年頃から一般的に使われ始め、昭和 62 年には官庁用語としても用いられるようになりました。

Q：「里山」という言葉が、最近、どうしてそんなに注目されはじめたのですか？

A：「里山」というのは、農耕開始時の焼畑が定畑となるに従い、集落周辺の森林を、低木類はマキとして、下草・落葉は堆肥として、カヤは屋根材として、コナラやクヌギは一定周期の輪伐で木炭として利用するようになり、森林そのものも防風林に利用して、人間が暮らしのために絶えず干渉を加え続けて創り出した有用な二次的自然（半自然）の森林なのです。そして、その中で、里山の作業周期に適応した生物が育まれて来たのです。つまり、「里山」は、**集落の近くにある森林で人が日常生活や経済活動に必要な資材を採取するための二次的自然林**といえます。

しかし、昭和 35 年頃の高度成長期以降は、燃料には石油、ガス、電気が、肥料には科学肥料が、建材や生活用具には鉄、セメント、プラスチック等が一般的に使われるように

なり、人々の「里山」依存度は急速に減退しました。そのため、「里山」は管理が疎かになって荒廃する一方、都市化の波がこのような「里山」を住宅や工場用地、更にはゴルフ場に転用するに及んで、「里山」的自然は急速に破壊への途を辿ったのです。

しかし、近年、地球温暖化を阻止する動きの中で、宮崎駿監督も「となりのトトロ」や「平成狸合戦ぽんぽこ」で訴えているように、「里山」を日本の原風景として回復させたいと願う運動が高まり、森林の「里山」的管理の重要性が再認識されようとしています。

「里山」という言葉には、人々のこんな想いが込められているのではないのでしょうか？

Q：成る程。最後に、「里山」と「谷戸」とはどんな関係にあるのでしょうか？

A：もうお判りかと思いますが、「谷戸」の三方を取巻く斜面樹林は、その集落の人々によって有用な「里山」として利用されて来ました。そして、その斜面樹林から滲み出す水源は田畑などの農耕を可能にし、水と緑の織り成す多様な生態系を育んで来たのです。

また、そうした「谷戸」の安定した生態系を維持させるには、適度な人の手入れが欠かせません。このように自然と人間の協同作業によって維持される「谷戸」と「里山」は、生産と消費のバランスの採れた安定した循環系社会を形づくって来たのです。

なお、谷戸の「里山」だけでなく、日本全土にあった「里山」は、かつては、わが国々々の 40% をも占め、日本の典型的な農村風景を形成しながら、生産と消費の安定した循環システムとして千年の間維持されて来ました。このような仕組みは、正に、維持可能な社会を目指す現代社会にとってひとつの良きお手本と言えるのではないのでしょうか。

以下は、平成20年9月6日開催の「第3回定例役員会」での決定事項等です。

[I] 今後の公式活動予定

9月	7日(日)	公式活動(樹林管理、炭焼き等)
	20日(土)	公式活動(樹林管理、ほたる、竹垣等)
10月	5日(日)	公式活動(樹林管理、ほたる、竹垣等)
	18日(土)	公式活動(同上)
11月	2日(日)	公式活動(樹林管理、竹垣等)
	15日(土)	公式活動(同上)

(注) 各公式活動日の具体的作業内容は、同活動日の数日前迄に決定通知する。

[II] 今後のパトロール予定

9月	14日(日)	加藤 文明	大木 通宏
	21日(日)	橋本 順二	橋本 弘子
	28日(日)	平野 利治	惣谷 実
10月	5日(日)	池田 陽一	飯野 光吉
	12日(日)	斉藤 和子	小倉 征子
	19日(日)	古賀 卓郎	川島 敏裕
	26日(日)	立川 成江	門田 教与
11月	2日(日)	篠原 英男	上原 隆一
	9日(日)	鈴木 勲	永田 一彦
	16日(日)	真鍋 とめ子	雨宮 誉子
	23日(日)	吉田 文雄	梶田 良春
	30日(日)	徳岡 正彦	山口 精一郎

(注1) パトロールは、「巡回チェックリスト」によって、実施して下さい。

(注2) パトロール結果は、上記「巡回チェックリスト」を、川島役員あて FAX () か、メール () によって、報告して下さい。

[Ⅲ] クラブ等の活動状況

(1) ほたる復活クラブ

- ① いこいの広場に再建した「ほたる幼虫飼育用ログハウス」がこの程完成した。今後、数週間内に、せせらぎから水を引き飼育器材を設置する。
- ② 今年は、6クラブ員が、9月7日より、平家ホテル幼虫350頭づつの飼育を開始した。飼育期間は九ヶ月余りとなろう。

(2) 園芸クラブ

8月29日、6クラブ員が、日高リーダーから、パンジー発芽に必要な種子、器材等を配付され、各自自宅において、9月1日を目途に種蒔きを実施した。

(3) 木工クラブ

- ① 「たけのこの道」の竹垣を全面的に作り直すこととし、「竹穂垣」様式を取入れることとした。作業は、9月20日の活動日から本格実施する。
- ② 11月2日(日)は、パークタウン自治会の秋祭りイベントに、「檜のコースター作り」で参加することとされた。多数のご協力を期待します。

(4) 炭焼事業

炭焼きは、今後は、奇数月の第二活動日に行うことに変更された。次回は、11月15日(土)午前7時の火入れとなる。

(5) 魅力ある森造り事業

前連絡文で公表済みの新中期計画、「地域住民に愛され親しまれる森造り」の具体策について、確認と見直し作業を行い、若干のマイナーチェンジを行うこととした。

[Ⅳ] その他

次回定例役員会

次回「第4回定例役員会」は、11月1日(土)、午後7時から、「関ヶ谷自治会館」において開催されます。

関ヶ谷市民の森愛護会会長 鈴木 勲

(文書担当 宮本 英利)